

優秀賞

新 治子 [福岡県/年齢非公開] テーマ「別れ～病室で会えた私の導師～」

いつもの時間より遅れていたのので、喉をぜいぜい鳴らしながらガン病棟の個室に駆け込みました。そして私は、そこで見た光景に驚きました。主人がやすんでいるベッドの側で初めて見る看護師が泣いているのです。私の入室に気づき「ご主人は、おやすみになったばかりです」と笑顔を作る看護師に、私は挨拶もそこそこに涙の訳を訊ねました。まだ幼女のような表情の残る看護師は真っ赤になった目をしばたたきながら話してくれました。「ご主人は孫に童話でも読み聞かせるような口調でした。『僕の家内は、昼は栄養士の仕事をし、夜は日本舞踊の教室を持っております。それで、若い頃から僕のできることは主婦の仕事の範囲まで手出しをしてきました。石油ストーブに灯油を注^さす方法さえ僕が入院する直前に教えてやったくらいです』温かい声でした」話を続けてきた看護師は、急に声を詰まらせて「話の終わりにご主人はこうおっしゃいました。『そんな妻だから、私が逝ってしまったら、苦勞するだろう、それが一番の心残りです』・・・」看護師はここまで話すと両手で顔を覆ってしまいました。まだ名前さえ知らない若い看護師が、妻である私より先に、主人の別れの悲しみを汲み取ってくださったのです。そのことがあった日の一週間後、主人は亡くなりました。底知れぬ深く寂しい時間を過ごすなかで、不思議なことに、あの看護師の涙の顔がたびたび夢に現われるのです。病院に彼女を訪ねました。不在でした。研修生で来て看護学校に戻った人では？ということでした。

死を目前にした主人の温かい心を、純粋な心でさらに豊かにして私に伝えてくれたあの看護師は、私の大切な導師となりました。必ず捜し当てて、御礼を申し上げねばと決意しております。